

## 富山県生物学会誌50号の発刊にあたり

会長 布 村 昇

昭和11年に富山博物学会第一号を発刊して以来、今回で50号を発刊することができました。古い会誌をひもといてみると富山博物学会と称していた創設のころはどれも、「これから会を作り発展させていくのだ」という気概が感じられます。

戦争をはさんで、物質的にも精神的にも空白時期がありましたが、戦後の物質が乏しく、経済的にも大変な時代の頃も再出発の熱意が伝わってきます。昭和26年11月に謄写版刷りで出された富山県生物学会報第一号掲載の進野久五郎会長による「巻頭の言葉」にも「自然科学は記載の科学であるといわれている。その記載を通して誰でもがこの科学の成果を浮けつぎ、またこれに累積もできるのである。学会も亦、その業績の記録の配布はいろいろな意味においてその使命は大きく、特にわが学会のように会員数が増加してくると、例会の度毎に出席し得ない者も相当数になることも考えられるからその事務連絡と研究業績要録なども載せて配布したのである。本会が嘗て作ったように会誌にまで育てたいという希望は会員の一致した意見であろうと案ずる。したがって、今後各地方の本会員に知らせたい行事の大要や、生物に関する資料短報をどしどし送付されるように願うしだいである。」(全文、ただし旧字を新字体に改めた)

当時、マイカーなど夢のまた夢、県内でも移動は今のようには容易ではなく、東京へ行くのに片道1日かかっていた時代でした。地元の生物学に関心の高い同好の士との交流はすこぶる貴重であったと考えられます。

昭和30年代後半から40年代の高度経済成長期になると物質的に豊かになり、通信手段や交通が発達しました。生物学も器官、個体レベルを扱った形態学、分類学や生理学などから細胞、分子レベルへどんどんマイクロへと進み、生化学や生物物理学などの法則の貫徹性の高い学問との境界領域も勃興してきます。一方、1970年前後から高度経済への歪みが現われ、公害問題や自然保護が叫ばれるようになると、急速に生態学が脚光を浴びてきました。

生物学もあらゆる学問と同じで、ますます専門化・細分化が進みました。大学や研究所、試験場などの研究施設の生物学の研究者の研究活動もどんどん発展を続けましたが、全国の学会誌でないと業績として評価されないこともあり、限られた研究費、研究時間を振り向ける余裕はないためでしょうか、これらの組織の研究者の加入割合は高くありません。また、交通手段の発展とともに近くにいる生物学の他の分野研究者とまじわるよりも、遠くてもより専門が同じ研究者との交流が有利となります。特に「研究業績」が重視される



よくなると中央の学会にのみ参加するという世智辛い状況が進み、地方学会はピンチを迎えました。

また、当会のメンバーの多数を占める生物や理科の教員学校教育関係者についても学校教育の現場が著しく多忙化し、とても生物の調査研究や一般への普及にまで時間が回らなくなったようです。このような状況で、本会に参加していただいている大学、学校、研究施設の方々に心から敬意を表したいと思います。

一方、生涯学習の進展とともに、博物館や動植物園が充実して、戦前から伝統のある施設の魚津水族博物館をはじめ、富山市科学博物館、富山県中央植物園をはじめ多くの植物園、富山市ファミリーパークなど多くの施設ができ、内容的にも生物学の研究・普及に大きな力を果たしてきました。しかし、どこも自らの仕事に手一杯の状況でした。

私が入会したのはそんなころで小林貞作会長や本多啓七氏が奮闘しておられました。特に本多氏は次の会長に就任後もご家族の方と事業のほとんどすべてにわたり献身的に行っておられ、会誌の原稿集めから校正、事業、庶務まで一人で行っておられたようでした。

このような中、次に会長に就任された長井眞隆氏が、事務局を富山大学へ、編集を富山市科学文化センターへ、事業を学校など学校教育関係者に分担されました。また平成5年の32号から表紙の色をふくめた体裁が変えられました。会の存続発展のための基礎ができたといつてよいと思います。そして会の近代化を成し遂げた恩人に、遅ればせながら長井眞隆氏に感謝状を贈呈でき肩の荷を降ろした思いです。

しかし、上記のような事情はどんどん進行し、会員数も次第に減少し、解散の可能性も議論されるようになりました。一方で自然の変貌が著しく富山の生物の顔ぶれもどんどん変わって記録を残すことが必要になっていきました。そこで、役員若返りを行い、活動方法を変えました。共通の調査場所を設置して、新たに会員の力による総合的な調査を実施し、県内の生物相や植生を記録しておくことにしました。また、役員や会員の方々のご努力で参加者が少なかった観測会を公開観測会とし、多くの方が参加されるようになりましたし、ホームページも立ち上げ、事務の合理化などの努力がなされました。幸い、会員数は少しずつ増え、研究会も大勢集まり、研究成果、会誌の発行も概して順調のようです。しかし、まだまだ道半ばといえます。

会の発足当時や会誌の発刊当事と状況は変わっていますが、夢と希望を持った集まりでなくてはならないことが必要という意味では「初心忘るべからず」です。多様な会員が独自性を発揮しつつ、魅力ある会、参加者一人ひとりが、会に入っていて良かったと思われる会にしなければなりません。

## 渋江川の生物調査にあたって

会長 布村 昇

An outline on the survey of Shibuegawa River and its watershed, Oyabe-shi and Nanto-shi, Toyama Prefecture, central Japan

Noboru Nunomura

富山県生物学会では会員が共同で総合的調査を行う調査を開始してから5年目を迎えた。全県のいろいろな場所を植物・動物を通じ、順次調査しようという趣旨で調査を開始してから本年は5年目になり富山県西部の砺波地方から一つの河川とその流域を選ぶことになったが、本年は富山県西部の中央に位置し、山地に森林を持ち農村地帯の平地を流れ、かつ以前まとまった調査が無かった渋江川を選定した。以前からの経験で魚類や無脊椎動物などの調査の経験から興味深い成果を得ることが期待され、長さも適当なことが選定の理由であった。

渋江川は南砺市(旧福光町)小又の医王山北側小又集落南の鑽石山(標高531m)を水源とし、で平野部に出る全長約15km、(福原1994より)比較的直線的で変化に富んでいると思われる。途中、高砂橋、人母橋、山田川橋、砂田橋、臼谷大橋、竹屋橋、上御亭橋、下御亭橋、棚田大橋、平田橋、瑞穂橋、竹倉橋、矢長橋、渋江川橋、羽根橋、岡田橋、綾子大橋などの多くの橋があり、島分橋付近で小矢部川と合流する。水生生物関係はこれらの橋のいくつかを選んで調査地点とした。ただし、上流付近は岸からの深さが大きく、なかなか調査地点にたどり着けなかった場所も多かった。

なお、平成11年に河川水辺の調査の一環として

魚介類や底生生物が調査され、2008年度に小矢部川流域の農業用排水路の調査された際、渋江川やさらにその支流にあたる本堂川のいくつかの地点も調査ポイントに入れた。

国土交通省による2000年に小矢部川の自然調査が行われた際、島分橋の調査が行われている。

重要項目である水生昆虫が報告に入らなかった調査は充分とはいえないが、この地域の自然を考える一助となれば幸いである。

### 引用文献

土生居 弘. 1976. 富山県教員山岳研究会・富山県高等学校体育連盟山岳部編. とやま百川. 北日本新聞社.

土生居 弘. 2003. 渋江川 (in 泉治夫ほか編著、越中山河覚書Ⅱ) p82. 桂書房. 315pp. 富山. 富山県高岡農林振興センター・富山県水生生物研究会・水土里ネット富山2009. 小矢部川流域地区生態系調査報告書.

平成11年度小矢部川水系(小矢部川)魚介類調査報告書.

平成11年度小矢部川水系(小矢部川)底生動物魚介類調査報告書.

福原俊郎. 1994. 渋江川. 富山大百科事典. p803. 北日本新聞社.